

西川一三著 『秘境西域八年の潜行』

チベットの東南部は中国が厳重な入域規制を行っているので入り難い地域であるが、カンリガルポやニンチェンタングラシャン山群など未踏の6千メートル峰がゴロゴロしていて、現在でも秘境の名に相応しいそうだ。(この間の事情については、この「図書紹介」ページ掲載の別項『チベットのアルプアス』や『ヒマラヤの東』に詳しい)。

しかし、北京五輪開催を期に中国のチベット政策が国際的非難を受けている現在、多かれ少なかれ中国もこの地域を解放せざるを得ないだろうから、この地域の禁断の山々が遠くない将来に解放されることを期待したい。そのような意味から、多少古い本であるが一冊を紹介したい。

日本人によるチベット紀行は河口慧海、多田等観、青木文教などがよく知られているが、これらはいずれも戦前のことで、また、その目的も仏教の研究が主であった。戦後初めて入蔵したのは本書の著者・西川一三であり、その当初の目的は第二次世界大戦末期の西北支那情勢を探るための特務機関員として派遣されたものであった。彼は、内蒙古、寧夏、甘肅、青海などを経てチベットに潜入、そこで日本は原爆で滅亡したという報に接した。この真偽を確かめるべくヒマラヤを越えてインドに潜入するも、既にインドには一人の同胞も残留しておらず、再びヒマラヤを越えてチベットに潜入したところから西域での潜行と放浪が始まったのである。

日本人の身分を隠して「ロブサン・サンボー」という名前の蒙古人の巡礼姿に身をやつし、時には乞食の群れに紛れ込んだりしながらの潜行は、終戦直後の国際環境下にあっては言語に絶する苦労であったことであろうことは想像に難くない。日本人であることがバレそうになり、何とか言い逃れたことも再三であったと記している。地名などのメモも日本語で記す訳にはいかず、チベット語で記して、それをチベット経典の中に隠し持っていたそうだ。身分を隠すため、糊口を糊するためにチベットの寺院に入り、ラマ僧に変身もしている。著者はインド・チベット間を7回も潜入しているが、ヒマラヤ越えは標高6700mのザリー・ラ(峠)であった。登山装備が発達している現在でも十分に高山病になる標高であり、食料も尽き襤褸衣だけを纏った乞食のような姿でよくも7回も越えられたものと、その精神力に感服せざるを得ない。

本書は、放浪の旅で接した各地の地勢、気候、風土から、人々の生活、習慣、言語、ラマ教の事跡・仏典・寺院の様子など、自分の足で見聞した者にしか描けない生々しい紀行であると同時に、当時(60年前)の西域の様子を記録した貴重な資料ともなっている。何年間も現地の底辺に溶け込んで体験したものであるから、文章にも生命感が躍動している。口絵や文中に挿入された写真も当時の現地の人々の暮らしぶりが伺える貴重なものであろう。著者は2008年没。

芙蓉書房 1972 年刊(新装増補版、上、下、別巻)

(注) 芙蓉書房版は絶版になっていて入手が困難であるが、中公文庫版なら古本が入手できる。

新本は抄録版しかないが、同じく中公文庫(『秘境西域八年の潜行抄』)。

